論文の内容の要旨

本論文は、「イタコ」という民俗宗教を対象にして、「イタコ」像の形成と民俗文化的変容

現実の諸相とその「変容」の局面に光を当てることを試みている。

本論文は、序章と第一部、第二部、終章から構成され、第一部が5章、第二部

が7章からなっている。序章「問題の所在」では、本研究の目的・意義・対象・方法について述べてい

る。意義と対象の記述に際しては、先行論の整理と問題点の指摘をもって立場の

明確化を図っており、前者では、日本における「宗教とマス・メディア」研究が

雑香 提出 学位申請論文（課程博士）

『マス・メディアによる『イタコ』像の形成と民俗文化的変容』 審査要旨

論文の内容の要旨
エンコーディングの分析に特化し、エンコーディングの局面を不問としてきた点、後者では、イタコを扱った従来の研究が情報化社会というコンテクストを考慮しないことと考えた点を指摘している。

第一部「マス・メディアによるイタコ像の形成」（第一章・第五章）では、

活字メディアを通じて、マス・メディアによって形成された大衆文化としての

イタコの通時的な把握を試みている。第一章「大衆文化としてのイタコ」の具体相を

確認するに先立ち、地域社会の文脈に成立してきた「民俗文化」としてのイタコ

を概観し、そのうえで、「民俗文化を表象する」という行為がいかなる操作であ

るのかを確認することで、表現分析に必要な視座の確立を図っている。

第二章・第三章・第四章では、新聞と雑誌を対象としてイタコの具体相を

明らかにしている。大衆文化としてのイタコには、その動向から四つの時代

区分「黎明期／発展期／転換期／拡散期」の設定が可能であり、第二章「イタ
漢語中文

這是中文的樣本，顯示了各種中文字符和語句的排列方式。
に関する知識の獲得経路
- 保有する知識／イメージの内容の把握を行った。

第七章 表象の受容と再生産・地方自治体の観光振興事業を例に
- 表象受容者の民俗文化領域への参入を促した要因として、観光分野を例に、まず
- マス・メディア以外の情報発信者による『イタコ』像の受容／再生産について
- 二つの地方自治体に着目し、これらの主体が『観光』の文脈で『恐山のイタコ』
- をいかに運用していったのかを、両自治体ないし関連団体（青森県観光協会など）
- の作成した観光案内書に描かれる『恐山』の変化より今後起こっている。

第八章 表象の消費と霊場・恐山の変容
- 『東京日報』『デーリー東北』の『恐
- 山大祭』関連記事を手掛かりとして、戦後、一九七〇年代までの期間を
- 対象に、『イタコ』『恐山のイタコ』という表象が恐山にもたらした変化を、
- 青森県の地方新聞である『東京日報』『デーリー東北』に掲載された『恐山大祭』
- の関連記事より考察している。
第九章「霊場興山の近代化」
大正期の「観光化」をめぐって

に伴う興山の変遷というマクロな問題を念頭に置きつつ、第八章で確認した変化の土台となる大正期の「観光化」に焦点を当て、その様相を探っている。

第一章「霊山のイタコ」を求める人々

第四章「霊山大祭・興山秋詣りにおける「イタコの口寄せ」の実施状況」では、論者の中から実地調査の結果に基づき、一九九○年代以降に加速した表象と客体との乖離がもたらした風景とい

観点から、興山における「イタコの口寄せ」の現状を記述している。

第二章「マス・メディアのまなざしと自己表象の再編－「自文化」としての

霊山信仰」をめぐって－では、「霊山のイタコ」という「他者のまなざし」を客体側がいかに受容したのかについて、下北地方における文化的自己表象とし

ての「霊山信仰」の再編を例に、その一端を明らかにしている。本章ではアカデ

ミズムという第三章の存在を視野に入れたうえで、マス・メディアのまなざしと

下北地方における「自文化」像との関係を読み解いている。
第二章 仮業の変容—イベント型口寄せを例に—では、イタコの知識度に起因して生じた「イベント型口寄せ」という仮業に着目し、その実態の解明を試みている。

終章「結論」では、「イタコ」という事例を通じて明らかとなった具体相を今一度整理したうえで、これらの結果より浮上する「情報化社会の宗教」の特性として、「他者」の威化化」と「個別的宗教世界の集合」という二点を指摘してくる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、民俗学、宗教学で多くの研究成果が蓄積されてきた「イタコ」という民俗宗教を対象にしている。筆者が問題とするのは、これまで研究が重ねられたしてきた「イタコ」に関する実施調査や地域社会における意味ではなく、"イタコ"
という宗教表象がマス・メディアによってどのように形成され、その結果生み出される新たな宗教的現実の諸相とその「受容」の局面に光を当てる点である。筆者はマス・コミュニケーション研究のステアート・ホールの「エンコーディング／デコーディング」の枠組みを用いて、日本における宗教とマス・メディアイア研究がエンコーディングの分析に特化し、デコーディングの局面を不問としてきた点、後者はイタコを扱った従来の研究が情報化社会というコンテクストを考慮してこなかった点を指摘している。当然ながら筆者の関心はデコーディングに係る宗教のリアリティ形成の問題にある。筆者はさらに表象が与える影響を二つに分別して考察している。ひとつは、受容者がどのように宗教的表象を受け止めかである。いまひとつは「受容者の存在に媒介される社会」である。この二点が本論でどのように検証され、マス・メディアと宗教に関する一般理論が構築されたかが問われることになる。
本論で興味深い点は、以下のような問題設定を行った際に直接の研究対象となるのは「マス・メディアによって表象されたもの」であるが、第一部で扱われているように、筆者は実際の恐山のイタコに関する実地調査を繰り返し、周辺の現象も含めて十分な調査を行っている。こうした実地調査を踏まえて新資料を含む詳細な文献調査を実施しており、こうした点は十分に評価できる。大衆文化としての『イタコ』に関して、その動向から四つの時代区分（黎明期／発展期／転換期／拡散期）の設定を見いだした点も興味深い。これまでのイタコをめぐる調査論文を精査している点も評価されていだろう。

第二部で論じられているマス・メディアにおける影響であるが、表象主体と教の「内」における自己表象と、「外」に置く他者表象に関して、個別のテーマとして論じられている。ツーリズムも視野に収めた論述は興味深いが、もっとも直接的な影響関係の検証となる部分では、大学生へのアンケートのみと、影響関係を明らかにするには平板である。
結論であるが、筆者は「本研究で明らかになった『イタコ』をめぐる諸相は、
いずれも、マス・メディアによって提示された宗教表象が受容者の宗教的リアリ
ティを構築しろうること…新たな宗教的現実を意味し出そうすることを示す」と述べ
る一方で、「受容者個人の保有するコードに依拠した「解釈」という能動的な
読みの操作が存在している」としている。そしてこの二つの領域の上に「個
別の宗教世界の集合」として宗教的リアリティがあるとするのが筆者の結論であ
る。

しかしながら、マス・メディアが提示する宗教表象には自覚的／無自覚的、意
識的／無意識的、表現様式自体にもブレがあり、統一されたイメージが受容
者／消費者に向けて提示されているとは思われない。また、受容者個人のコード
による能動的な解釈を前提にしてよいかどうかに関しても疑問が残る。日本人の
宗教性は自覚的意識的なものではなく、どこまで能動的な解釈がなされているか
疑問である。能動的に解釈された「個別の宗教世界」が確認されないとすると、
平成二十八年二月十五日

主查

副查

副查

国学院大学教授

駒澤大学教授

黒池石崎上井浩良研行正士

印 印 印
大道 晴香
学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（宗教）

の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十七年十二月二十四日
学力確認担当者

主査
國學院大學教授

副査
駒澤大學教授

直 井
池上 良行

黒崎 浩正

□□ □□ □□